

明
月
エ
里

omaera doredake
 orenokoto suki dattandayo!

OMA-DORE!
お前ら
どれだけ俺のこと
好き!
だったんだよ!

試読版 白雪編

プロローグ 覚醒の夜明け

——『恋愛脳』^{れんあいのう}とは、あらゆる種^{しゅ}に備わった認知の能力^{パワ'}である！

本能を司^{つかさど}る右脳^{うのう}により、直感で得た恋の衝動を目覚めさせ——。

理性を司^{つかさど}る左脳^{さのう}によつて、恋心を具体化し認識させる。

自らの意識に潜在する『好き』を『発情』——もとい、

恋心として自分の気持ちに気づかせる能力。

理性と感情を区別する仕事脳とは対極に位置するこの恋愛脳が発達していなければ、いくら誰かを好きになろうとも——恋愛関係にまでこぎ着けることは叶わないだろう。

そして今、ある少年の周りにある少女たちがいた。己の才覚を信じ、よくあつ抑圧された社会の中で自らの道を貫き。

しかし、自分の気持ちには呆れるほどあき鈍感どんかんだった『非恋愛脳の才女たちは、ある少年に起きた事件を境に覺醒かくせいすることとなる。

第一節 『非』 恋愛脳才女の建前

「——あしみやせんぱい芦宮先輩。少々、お時間をいただいてもよろしいでしょうか？」

暖かな五月の初旬。

放課後の教室に侵略者が攻めてきた。

元名門お嬢様学園の制服を誰よりも優雅ゆうがに着こなす——

年生。

サラサラの銀髪をリボンでまとめた凜りんとした美少女の

名は、月ノ瀬白雪。

入学してひと月足らずで、校内の噂になつた有名人だ。端正な顔立ち、つややかな白い肌、うつすらと赤みがかつた魔性の瞳。

トップの成績で入試を通過し、入学式の挨拶を務めたことは記憶に新しい。

名家の生まれである少女が持つたおやかな気品は、芦宮隆人を圧倒する。

後輩の美少女令嬢が違う学年の教室を尋ね、男子に声をかける。

それだけで教室のクラスメイトたちは色めきだち、黄色い声が上がつた。



「あの月ノ瀬さんが芦宮君に？　いつたいどんな用事なのかしら？」

「芦宮君には恋人ができたばかりとの噂ですのに、まさか——これが略奪愛!?」

なんの事情も知らない女生徒たちがはやし立てるが、この事態の中心人物、芦宮隆人は困惑していた。

月ノ瀬白雪がただ可愛いだけの少女ではないことは、誰よりもよく知っている。

嫌な予感を隆人は覚えた。

(いつたいなにをしに来た？　こいつは——)

「放課後なので大変忙しいことは存じています。おおかた先週できただばかりの新しい彼女と、この伝統ある

学園でどうイチヤつくかを考えるので必死なのでしようね」

白雪の小さな形のよい唇から、探りの言葉が紡がれる。上品な微笑^{びしょう}の裏に、小悪魔のようなからかいが潜^{ひそ}んでいる。

「お前、俺^{おれ}をなんだと思つてるんだ……」

「失礼しました。いくら芦宮先輩でも、そういうことは校舎の裏とか人目のつかない場所でしますよね。ところで見つかったら停学ですよ。同じ中学のよしみで忠告して差し上げますが」

「やめろ！ 暗に俺が校内で停学必至な背徳的行為をしているような言い方は……！」

風評被害も甚^{はなは}だしい。

言われ損にもほどがある。

そして白雪の指摘は、半分が事実であり半分が異なる。隆人は先日、生徒会長に告白されて恋人になつた。しかしその一週間後に、手すらつながないまま速攻でフラれていたのだ。

ちなみに白雪というとまるでどこかのお姫様のような名前だが、実際は毒リンゴを食わされそうどころか、本体が毒の塊^{かたまり}のような存在である。

文武両道^{ぶんぶりょうどう}の令嬢^{りょうじょう}といえば、スクールカーストでは最頂点。

あくまで平均的な高校生——いや、ちよつとだけり

ア充方面に寄つてゐると装つてゐるが、内面は陰キヤである隆人では御しきれない存在だ。

二年前——同じ中学に所属していたときも委員会で行動を共にしたときも、彼女の毒舌どくぜつには手を焼かされた。しかし高校へと進学し、この学園で再会するまでは接点もなかつたはずだ。

（わからん。なんなんだ!?　こいつの、白雪の目的は——）

隆人は困惑し、白雪の真意を読み取ろうとする。が、わからない。

愛らしくも自信たっぷりな表情で、こちらを見つめてくるだけだ。

「ほら、早くついてきてください。それとも年下の女の誘いには乗れませんか？ 年上専門の熟女マイスターなのでですかそうですか」

「つ……！ わかつたよ！ 行けばいいんだろう！ ここでやるな！」

好奇心でどよめく教室の空気を背に、隆人は白雪のあとに続いた。

匂いをおいを運んでくる。 隆人が白雪に連れられて階段を下りると、風が新緑の



どこか高貴こうきさすら感じられる古めかしさ。

あるいは奥ゆかしいともいえるアンティークなデザインの木造校舎は、この星詠学園ほしよみが元々は歴史あるお嬢様学園だつたことを示している。

時代の流れとともに少子化あいなが進み、名家の概念も薄れ、存続のために共学と相成つたわけだが——その独特的な校風は今も色濃く残つていて。

『曰く、学業の中で個性を重んじ、長所を伸ばす』

したがつて、一芸に秀でた変わり者の子女しじょが自然と集まつてくるのだ。

共学化し数年が経過した今も、女子に人気があるせいが男女比は一対四となつていて、

隆人は校長と知り合いだつた叔父さんに、あまり人づき合ひを考慮しなくてよいという学園があると紹介され、喜び勇んで行つたら見事に騙だまされたのだ。

（こんな学園……。嬉しいどころか、女子が多くて、余計に気を遣つかうんだが？）

そんな恨み言うらごとを胸に秘めた覚えがある。

—— 隆人が通つていた中学校では、意識の高い連中
が多かつた。

イケメン。美少女。あるいは人気のスポーツが達者たっしゃな者、トークができるものが階層構造の最上位に属し、陰キヤたちが虐しいたげられる箱庭社会。

小学生時代。好きな子に陰口かげぐちを叩かれていたところを聞いてしまったトラウマがある身として、隆人が選んだ処世術は無難ポジの確立——ようは中間層である、真面目系さわやかキャラを演じることだつた。

陸上部の一番手けんじという、他者と距離を取りつつも、見くびられない立ち位置を堅持し、容姿や身だしなみにも気をつけて、それなりに充実している感じを装つていた。なお、陸上部を選んだのはチームプレイをしなくて済むからであり、隆人の外見を整えたのは従姉妹いとこの美容師である。

そのおかげか——何度か同じ学校の女子に告白されかけたこともあつたが、トラウマのせいで及び腰になつ

ていた。

しかし今の学園に入つて一年が過ぎた頃、恋愛への欲求は高まつていたため、もうひとりの自分から突つ込みが入つた。

（――さすがに俺も、たかが小学生時代の出来事引きずり過ぎじやないのか？）

この学園での立ち回りも慣れてきたことだし、今月の恋愛運は星五つの最高ランクだつた。

とはいえ、隆人とて単なる雑誌の運勢を真に受けたわけではない。

要はなんでもいい。きっかけがほしかつただけだ。人は経験を元に、人生の指針を得る。

だが、過去に囚われ今の行動に及び腰になるのも愚かなことだ。

そんなとき、都合のいいイベントが起きた。

ボランティアで行動を共にした美人の生徒会長から何故か見初められ、つき合つてほしいと申し出られ、隆人は喜んで承諾した。

あのときは天にも昇るような気持ちになり、マンショングの自室で垂直跳びをしまくり真下の住人から怒鳴り込まれたものだ。

恋人のいる充実した学園生活。

過去の呪縛から解き放たれた隆人は、青春という名のイチャコラを謳歌できるはずだつた。

（――まあ、一週間も経たないうちにフラれたんだけどな！）

思い返す隆人の顔に諧謔の笑みが浮かぶ。
むしろ無理をした笑いである。
頬ほおが引きつたまま固まっている。

『夏から海外留学の予定が入つてしまいまして、すみません。お別れしませんか？』

いやいやいやいや！　まだ夏まで一ヶ月以上あるじゃないっすか。なんすかその見たいテレビ番組があるから今日は早めに帰りますみたいな適当な離別の理由は。

まだ会長の部屋に行つて『今日は両親が旅行でいない
んです』どころか初めてはレモンの味だつたねどころか
緊張して汗かいてるから手を繫ぎづらい……とかもない
んですけどそれはちよつとどうなんですか畜生ちくしやうというか思
い出に胸くらいうれしさも揉ませろと思わず言いたくなつた隆人だ
つたがさすがに自重じぢょうした。

と嘘うそだ。

そんなこと言ひ勇気は最初からない。思つたのはほん

とだ。

要は生徒会長が持つていた隆人へのイメージが、実物

とはかけ離れていたのだろう。

——とまあ、そんな感じで。

あつけなく人生初めての恋人関係は終わりを告げ——
今後はノリや勘違い、空氣に流された安易な恋愛は絶対
にしないと、隆人は固く心に誓つたのだつた。

それが、ほんのつい先日の出来事である。

しかし、どこをどうやって広まつたのか。

生徒会長かちゅうが美人で有名だつたせいで、完全に隆人は噂
話の渦うず中にある。

つき合つて速攻で隆人がフラれたというその事実まで
は広まつていない。

だが隆人本人は、失恋のダメージから回復していない。
その現実とどう折り合いをつけようか。バイトで稼い
だデート用の資金を、エロブルーレイにつぎ込んで現実

逃避してやろうかと思つていたまさにそのとき、後輩の月ノ瀬白雪が訪ねてきたのだ。

（つていうかコイツ、俺になんの用があつてきたんだマジで？）

歴史ある木造の床^{ゆか}を歩き、渡り廊下にさしかかつた瞬間、隆人の意識は現実に戻る。

中学時代こそ生徒会執行部で共に仕事をしていたから、むしろ人嫌いであろう白雪の知り合いの中では、まだ親しい方だと思うが。

「どこを見るんですか？　発情中の先輩のことですか
らおおかたわたしのふとももでもチラ見していたんでし
ょうけど」

「ばつ……！　おまつ！　別に見てねえよ！」

むしろ今の言葉で気になってしまい、視線が釘づけにされてしまう。

すらつとしつつも、少女特有の丸みも残っているふとももは、黒いニーソックスとのコントラストで大変素晴らしい。

歩く姿勢も綺麗で、それだけで絵になってしまう。

口を開けばマウントを取りたがるドSの少女だが、見た目は深窓の令嬢と呼ぶに相応しいので、悔しいけど見ちゃう。

表向きが傲岸不遜ごうがんふそん、ワールドイズマインの性格なので周囲にはそう思われないようだが、意外と気遣いもでき

て優しいところもあるのだ。

「お前らどれだけ俺のこと好きだったんだよ！」試読版 白雪編
というか、今頃気づいたが、先を歩く白雪は時折隆人の方を振り返り、チラチラと視線を送っていた。

（なんだ？　あの視線は。さつきから俺の反応を気にしているような——）

はっ！　と、隆人は息を呑^のむ。

（アイツ、この前のことを根に持っているのか……!?）

数日前のこと。

廊下にて白雪から教材の荷物運びの手伝いを頼まれたとき、生徒会長とつき合い始めたことを自慢^{じまん}してしまつたのだ。

（このまま俺が速攻でフられた一件をここで暴き、マウ

ントを取ろうとしてきているのでは?」

隆人は少女の意図を想像し、焦る。

白雪としてはからかい半分の仕返しだとしても、今の隆人にとっては致命傷となる。

『もしかして、ほんとにもうフラれたんですか？　あれだけわたしに自慢をしてきたというのにー。お気の毒様ですね』

「うぐつ！」

脳内に浮かんだ白雪の幻影が、嘲^{あざけ}るような笑顔で心をえぐつてくる。

呼吸が乱れ、うめき声がかすかに漏れた。

（――い、いかん、それだけはなんとしてでも避けな

くては！　俺の心が死んでしまう！）

恐怖に怯える隆人は、これっぽちも気づいていなかつた。

普段絡からんできてはマウントを取ろうとしてくる白雪自身の一つい最近まで本人ですら気づいていなかつた現在の真相に。



少女は高鳴る鼓動を抑えながら、背後を歩く隆人の顔を振り返りチラ見する。

その頬は、期待と昂揚こうようでかすかに朱に染まつっていた。

（ふふ……。突然連れ出されてドキドキしているようですね。わたしとふたりきりになる状況でその反応は、とてもいい感じです。はあ、うまくいってよかつたあ……）

長い廊下の先を歩いていた一年生の才女——月ノ瀬白雪は安堵に胸をなで下ろし、隆人の想像とはまつたく別のことを考えていた。

普段は堂々と振る舞つている白雪だが——こう見えて、慣れないことに関する割と小心者である。

むしろその小心を隠すために、普段から毅然とした態度で武装しているわけだが、その眞の姿を知るもののはほとんどいない。

わざわざ二年の教室まで飛び込むのは、かなりの勇気を要した。

白雪がそこまでして、隆人に声をかけたのにはわけがある。

中学時代。

たまたま委員会と同じだった白雪は、隆人と接する機会があった。

当時から自分を守るためにガードを固めていた白雪だが、「ある出来事」に関しての、隆人の行動を見て、つき合ったに足る人物だと判断した。

当時から周囲に人は多かつたが、対等と認めた者などいなかつた白雪が、勝手に友人認定していく。

生来のプライドと、自らの本心を隠すために塗り固めたスタイルで生きていた月ノ瀬は、隆人をさりげなく**ちようほう**重宝して仕事を与え、側に置いていた。

隆人の友人たちは面倒を押しつけられないと災難に思つたようだが——白雪としては信頼し、自分なりに好意を示していたつもりだつた。

が、恋愛感情を持つていたかといえばそうではない。自分にはもつと相応しい者がいるはずだ。

名家の令嬢であることを自覚し、自分のやるべきことと、やりたいことを摸索して生きていく中で、漫然とう考えていた白雪だつたが——。

それはただ、本心に気づいていなかつただけだと思ひ

知つた。

——数日前。

星詠学園一年生の教室にて、白雪はある噂話を聞いた。

「ねえねえ知つてる？ 二年の芦宮先輩つて」

「見た目はそこそこいいよね？ この学園だと恋人は作りづらいから、彼女いないのかもしねないけど」

（——ふふ。あの人があんなにモテるわけないじゃないですか。一見さわやかキャラですが、奥手な頑固者ですし）

一年生の教室でそんな噂を聞きながら、内心白雪は鼻

で笑つたものだ。

（それに、何故か知りませんが女の子にそこまで興味はないようですし。完全無欠のわたしにも告白ひとつしてこないのですから、他の女になびく道理なんて）

「それが、もうつき合つてゐるみたいなのよ。生徒会長に告白されてOKしたつて——」

「え——————つ!?」

我を忘れて叫んだ瞬間、教室の時が一瞬止まつたことを、白雪は覚えている。

三秒後、何事もなかつたように着席し、周囲の会話に耳をそばだてた。

（ま、まさか、そんな……。生徒会長みたいなミーハー

が、芦宮先輩を好きになるわけが——）

そう思い込もうとしたが、どうやら噂に間違いはないらしい。

まだ信じられなかつた白雪は、本人に直接問い合わせにした。

授業の教材を運ぶ役目を買って出たあと廊下で待ち伏せ、あたかも偶然会つたフリをして隆人に手伝いを頼み、話す機会を得た。

「別に構わないけど。一年で手伝ってくれるヤツいないのか？」

「独り身の寂しい学園生活を送っている先輩にサービス

さび

ですよ。わたしのような年下の美少女に声をかけられる
ことなんてありえないんですから」

からかうように白雪は言つたが、隆人は余裕の笑みを
浮かべていた。

「ま、つい先日まではその通りだつたけどな。もう俺に
も恋人ができるんだぜ？ 悪いな白雪、先を越しちまつ
て

「……」

ピキッ！ と、告げられた白雪は真顔のまま石化。

隆人に対し、常に対等以上の関係を維持してきた（と
一方的に思つている）白雪の中で、築き上げてきた牙城がじよう
が崩壊する音が聞こえた。

そして、両手で抱えていた教材の辞書を取り落とし、その角が足の小指に命中した。

「いつたあつ！」

肉体と精神へのダブルショックで一瞬涙目になつた。

「お、おい大丈夫か？」

隆人が真剣な顔で、立つたままうつむく白雪に声をかける。

（…えつ、そんな。嘘ですよね？　先輩に恋人ができるなんて、そんな予兆^{よちよう}、全然——）

内心、汗がダラダラとしたたり落ちるパニック状態だが、そこは腐つても一流の才女である。

演技という仮面をかぶることなどお手の物だ。

少女はすぐに微笑を作り、やうりと髪をかき上げる余裕の態度で迎え撃つた。

「ええ、驚きました。——で、今期はどんな嫁よめなんですか？」

「いや、アニメで好きなキャラができたよって話じゃねーからな!? しかもクールごとに変えてるミーハーじゃねえかどんだけだよ俺は！」

隆人は引きつった顔で突っ込む。

「まあ、蓼食たでう虫もなんとかと言いますからね。——ところで先輩はどんな虫に好かれたんでしようか?」

「人だよ！ だいたいそれはただのことわざだろ？
!？」

「こちらもただの比喩^{ひゆ}ですよ。悪い虫がつくるというじゃありませんか」

「俺はお前のひとり娘かつ」

と、怒濤^{どとう}の勢いで言葉を投げ合つたあと、隆人は周囲^{しゆめい}を確認しつつ、声を落として白雪に告げる。

「まだ誰にも言つてないけど、うちの生徒会長だよ。お前も知つてるだろ？」

「……ツ!?」

かぶつている余裕顔の仮面にビシッと亀裂^{きれつ}が入り、白雪は呆然^{ぼうぜん}としかける。

直接当人から伝えられたことで、信憑性^{しんぴょう}が増したのである。

（なんで、なんでなんですかつ？　いえ、ここはまだ、先輩の一方的な勘違いというか思い込みという可能性もつ！）

崩れ落ちそうな両膝りょうひざに力を入れ、なんとか堪こらえる。

「ふ、ふふ……。先輩、勘違かたがたいしてはいけませんよ。生徒会長は優しい人なんですから、大方落とした小銭を拾つてもらつた際に手でも握あくられただけなんでしょう？」

「俺をレジ打ちのお姉さんに恋するレベルにまで落とすんじゃねえ。いや、ほんとだつて、メールにも履歴残りれきつてるし」

隆人は取り出したスマホの画面を、白雪に突きつける。そこには『告白を受け入れてくれて、ありがとう』と

いう、生徒会長からのメッセージの履歴があつた。

(……)

白雪は真顔になり、全身が真っ白な灰になつた錯覚を抱く。

「……生徒会長、人には言えない罪を犯していたんですね。きっと先輩に脅おどされた挙げ句その告白を強要されて——かわいそうに」

「何故そこまで現実を否定する」

死んだ表情で呟つぶやく白雪に、隆人は呆あきれ顔で突つ込みつつ、

「そんなに羨うらやましいのか？　それとも——もしかして、実はお前も俺のことが好きだつたとか——？」

「……じよ、じよじよ冗談は顔だけにしていただけますか？ そんなわけがないでしょう！」

なんとか仮面をかぶり直した白雪は、パイツとそつぽを向いて否定する。

「わ、わたしにとつてせいぜい先輩は、使い勝手のいい知り合いというくらいのものです。猫ねこでいうなら手を借りるくらいの評価です」

「それは俺を直接的にデイスつてると受け取つていいのか？」

ほぼ役に立たないという意味だと、隆人は受け取つたようだが、

「なにをおつしゃいますか最大限の贅さんじ辞ですよ！ 猫の

価値はほぼ肉球にあるようなもののじやないですか」

「それも偏つた感性だけどな！ 猫がかわいそう！」

が、論点はそこではない。

白雪自身錯乱さくらんし、なにを話しているかよくわからない。「ま、まあ、確かに一定の信頼は置いていたかもしだせんが。このわたしから恋愛の対象として見られていたと思つたら大間違ですよ……つ！」

びしつと人差し指立て、白雪は動搖を隠し虚勢きよせいを張る。

「そうか……。ま、そうだよな

心なしか、がつかりしたような聲音こわねの隆人に、内心白雪は焦つた。

「先輩がわたしをいやらしい肉欲の対象として見ていたのは間違いないでしようけど」

「人聞きの悪いことを人目のあるところで言うな」廊下を行き交う少女たちが、疑わしげな視線を隆人に向けている。

実際のところ、どうだつたのかは、白雪も定かではない。

しかし目もくらむような美少女が、側にいるようにはりげなく仕向けていたら、一種の期待を持つくらいは自然ではないはずだ。

隆人が過去のトラウマから恋愛に関しては慎重になつていたことと、白雪が恋愛に興味がないと思つていた隆

しんちょう

人の内心など、白雪の立場からは知る由もない。

「ま、最近の俺は機嫌がいいからな。失礼なことを言わ
れても流してやるよ」

教材を運び終えたあと、倉庫の前で隆人は呟く。
その□元には勝者の笑みが浮かんでいた。

「ふ、ふふふ……見物せいへきですね。女性の靴下くつしたがめちゃくち
や好きな先輩の異常性癖いじょうせいかに、どこまで生徒会長が耐えら
れるか——」

「なんで俺の異常性癖がお前の中でデフォなんだよ！
あとなんで俺が靴下好きなことを知っている!?」

「では、失礼します。手伝つていただきありがとうございました」

隆人のボケはスルーされ、ペコリと一礼して白雪は立ち去った。



なんとかその場は乗り切つた。

——が、少女に芽生え^{めば}た胸の痛みが消えることはな
かつた。

というかその後、意識がもうろうとして千鳥足^{ちどりあし}になり、
保健室に寄つて早退した。

ふらつきながらも自宅へと帰り、体調不良を侍女にメ
ールで相談したところ、

『それはひよつとして、失恋のダメージなのでは？』

という返信があり、白雪は立腹した。

「はあ？　ふざけないでください。わたしは真剣に病気で苦しんでいるんです……！」

ベッドの上で横になりながら白雪は声を上げて反論したが、翌日以降も隆人とすれ違う度にモヤモヤに苛まれ、自覚するしかなかつた。

（なんということですか。このわたしが……先輩を好きだつたなんて！　このわたしに自覚がなかつたばっかりに！）

既^{すで}に遅かつた。

自分の気持ちに気づけなかつた『非』恋愛脳の白雪は、

泣く泣くこれから学園生活を送るより他なかつたのだが——。

隆人が早々に生徒会長からフランクされたことを知り、白雪は立ち直つた。

失恋の直後は、精神的に弱まつていて、
これは怪我が功名こうみょうであると思つた。

「ふふ、可愛い才女の後輩であるこのわたしが声をかけ
れば、即チニコマも同然でしようね」

『あの、水を差すようで恐縮なのでですが——』

と、後日再び、侍女からのラインメッセージが届く。
『お嬢様はあのあと、隆人様に恋愛感情などないと伝え
てしまつたのでは？』

「……」

自室にて、寝間着姿で髪をかき上げたまま、白雪は固まつた。

当たり前の話だが、白雪がそう隆人に言つてから、まだ数日も経っていない。

「なんでもわたしはそんなこと言つたんですか!? わざわざ直接、本人に！」

『知りません。お嬢様のプライドが無駄に高過ぎるせいではないでしょうか？』

侍女は慣れた態度で応対する。

『あれは嘘だつたと言えばいいじゃないですか？ 強がつてすみませんでした本当はあなたが好きだつたんですよ

と

「そんなみつともないこと言えるわけないでしょ？」

常識的に物事を考えてください！」

『失恋したと自覚しないで早退した方が、遙^{はる}かにみつともないと思うのですが……』

淡々と呟く侍女の言葉を白雪は無視し、考える。

「どうすればいいのかしら」

今が隆人をモノにする絶好のチャンスであることに間違いはない。

だが動き方を間違えれば、白雪は自らのアイデンティティを失うことになる。

勉学も運動も、家柄^{いえがら}も容姿も——後輩でありながら

全て上回つていた自分が、今後逆らえない決定的な弱みを晒すことになつてしまふのだ。

もし仮に、隆人にそれが知られたとなれば——。
『そ、うか、悪かつたな白雪。お前の気持ちに気づいてや
れなくて——。お前、そんなに俺のことが好きだつた
んだな』

などと、さわやかな笑みで言われてしまうだろう。
「つて……誰がですかっ!? 勝手に思い込まないでくだ
さい！」

隆人からそうニヤニヤとした笑みで告げられる想像を
しただけで、恥ずかしさが炎となつて顔面から吹き出る。
はあはあと息を切らした直後、白雪は我に返り、考え

る。

今まで保つてきた体裁が消失し、一気に自分の格が地に落ちてしまう。

万が一隆人とつき合うことになつたとしても、えいごう永劫そのことでいじられてしまうだろう。

そんな屈辱くつじょくには耐えられないのが白雪しらゆきという少女なのだ。

（わたししから気持ちを伝え直すなんて絶対に無理——
けど、この機会を逃すわけにはいかない）

一晩中悩んだ末に、白雪はその知能を総動員し、答えを導き出した。

まずは自分の力を最大限發揮できるフィールドへ、隆

人を引きずり込むのである。

真実を明かさぬまま、隆人を落とすために。



そんな白雪の考えなどつゆ知らず、隆人は疑いの眼差しを白雪の背に向けていた。

（やはりこいつ、俺の失恋を知つて、前回自慢した俺をからかう気なのか……？　だが、既にここまでついてきてしまつた以上、どうやつて逃れれば——）

特別校舎へと続く、吹き抜けの渡り廊下に人影はない。この辺りが、処刑場としては適切ではないかと、隆人

は震え上がつた。

時折僅かに振り返る白雪はかすかに頬を染めていたが、隆人の視点からは欲情したサディストの笑みにしか見えない。

隆人は胃が痛むようなプレッシャーを受けるが、その苦しみから逃れるために、脳の一部が快楽物質を分泌した。

（待てよ。ひよつとして逆の可能性もあるんじやないか？　俺が会長と別れたことを知つて、わざわざアプローチをかけてきたのだとすれば——）

隆人は突如、ポジティブ思考に覚醒する。極限のストレスに晒された防衛本能による妄想だ。

（ふ……。可愛いところあるじゃないか。やはり俺が会長とつき合つてしまつたことが、ショックだつたようだな！）

『わたし、自分の本当の気持ちに気づいたんです。実は先輩のことが――』

もじもじと上目遣いで見上げてくる白雪の姿を脳裏に浮かべる。

常にマウントを取つてくるD/Sな性格のせいで周囲は敬遠しているが、外見は百二十点をつけられるほどの美女で、文武両道のパーフェクト・ガールである。

くびれのあるスレンダーな体つきだが、胸はブラウスとブレザーを押し上げるほどでかい。

仮にそんな彼女がデレしたとしたら——これ以上の破壊力は存在しないだろう。

（いや、まつたくあり得ない話でもないしな……）

恋愛感情などないと以前の白雪は言つていたが、中学時代に彼女の側に誰よりも多くいられたのも隆人ひとりなのだ。

奇^く傍^{はた}から見ればドン引きするような隆人の現実逃避だが、奇しくも今回に限つては当たつていた。

隆人がそんなことを考えつつ、そつと目を伏せた、そのとき。

「好きです。つき合つてください」

意外な声が聞こえて隆人は目を開けた。

が、言つたのは少し前を歩いていた白雪ではない。

といふか、発言者は星詠学園の少女ですらなかつた。年齢的には隆人と同い年くらいだろうか？ 見慣れぬ他校の制服を着た少年が、白雪の前に立つていた。

（なんだ？ 白雪は、このために俺を呼び出したのか
）。いや、違う。ただの偶然か）

どうやら学外からやつてきた少年が敷地内に入り込み、白雪に告白をしてきた。という状況のようだ。

突然の出来事だが、少年の顔立ちも悪くはない。

若干全体の雰囲気からチヤラさを感じなくもないが、

じやつ
じやつ
かん

それは隆人の主觀によるものかもしれない。

少なくとも外見印象のみで評価するならば、それなりのランクの男だと思われたが。

「なんか言われてるみたいですけど。どうするんですか、先輩？」

白雪は真顔で、少し背後で足を止めていた隆人を振り返った。

「……違うだろ!? お前が言われてるんだよ！ なんでおクテイブな男好きホモセクシャルの男に俺が告白されたと思つたし！」

「そうなんですか？ ええと——あなたとは初めまして、ですよね？」

白雪は丁寧ていねいだが、さらりとした聲音で対応する。

そこそこのイケメンである他校の男は、肩すかしを食らつたように戸惑つた。

「え……ま、まあ。そうだけど、一目惚れなんだよ！

登校中にキミを見かけて、噂を聞いてさ——」

「わたしのことなどなにひとつ知らないのに、好奇心で？ それでいきなり告白ですか。気が早いことですね」

白雪の□元に緩やかな弧が描かれる。

つき合いがあつた隆人にはそれは微笑というものではなく、呆れた笑みの類だと知つていた。

(怖つ……！) さつきしていた俺の甘い妄想が崩れてい

く……！）

が、告白してきた少年は、この時点では、既に敗北していることに気づかなかつた。

「これからお互いを知つていければいいと思つてさ。今 の時代、お友達から始めるなんて古過ぎるぜ」

「そうですか。では、わたしのことを少し教えて差し上げます」

白雪はキラリと目を光らせて、自信たっぷりに腕を組む。

続いて少年を指さした。人を指さすなど教わらなかつたのかと隆人は言いたくなつたが、どうやらわざとのようだ。

「あなたは——とても『恋愛脳』が発達しているのですね」

「は……？」

唐突な白雪の指摘に対し、少年は目を丸くする。
「生物が発情する機能のことですよ。節操^{せつそう}のない即物的な恋愛に励んでは一喜一憂^{いつきいちゆう}し、自分を異性にアピールする努力だけは事欠かず、やれSNSでバズることしか考えていない、発情期のケモノみたいな存在。底の浅さが透けて見えるようです」

あまりに自然な口調なので、侮辱^{ぶじょく}されているということも、相手はすぐに気づけなかつたようだ。

「整髪料と香水のつけ過ぎで装飾過多です。一見、女性

と話をする勇氣があるようで、実際のところせせこましくてこすつからいです」

「い、いや待てよ！ 人は中身が大事だろ？ 外見の第一印象で判断するのは——」

「初対面では外見で中身の人格まで判断されるというのが社会の常識ですよ。そもそも内面というのは無意識に外にまで滲み出してしまるものですね。実際のあなたも軽薄でだらしなさそうですねしだいたいそれを言うなら今回わたしにいきなり告白してきたのも第一印象が全てではないのですか？」

すらすらと、涼しげな表情で白雪は言葉を羅列する。

「……ぐ、う、あ」

あーあ。という感じである。

この手の光景は中学時代に何度も隆人は見てきている。
むしろ、白雪の噂――『恋愛嫌い』を知っている人
間ならば、^{あんい}安易に告白しようなどと考える方がおかしい
のだ。

白雪が明るい笑顔で、堂々と胸を張つている。
中学より成長しているようだが、ガン見がバレたら怒
られそうなので目をそらす。

「――で、あなたはなにか、人に自慢できることはあるのでしようか？　どんな知り合いがいるとかではなく、
あなた自身のことで」
もはや、オーバーキルだ。

名も知らぬ他校の少年の顔からは自信が消え失せ、死刑宣告を受けたよう青ざめている。

（やつぱ怖つ……！ やはりコイツに傷口をえぐられるのはダメだ……。これから俺をもなぶる気だつたら死ぬ！）

改めてその切れ味を見て、隆人はビビっていた。

かがつていてることに気づかなかつた。

「く、うぐぐ……！」

直後、他校の少年の怯えた瞳に、ギラついた叛逆の意
志が宿る。

追い詰められた獲物が取る行動は一択である。逃走か、

抵抗か。

この少年は後者を選んだ。奇しくも白雪の指摘した通り、もつとも頭の悪い方法で。

「うつ、うるせえええ！　ちよつと可愛くて金持ちでスタイルもよくて勉強も運動もできるからって調子に乗るなあああ……！」

……いや、完全無欠じやねえか。

なぜ戦いを挑もうなんて思つたんだよ。

などと隆人は瞬間的に突つ込みつつ、両手を上げて白雪につかみかかろうとした他校の少年を見てはつとする。

「　白雪！」

隆人がとつさにかばおうと走り出すよりも速く、白雪

は自ら男の方へ進み出る。

少年の伸ばした右手をつかんで、ぐるりと背を向けて反転し、そのまま相手の勢いを利用して投げ飛ばした。

「ぐつ、おあつ……！」

ドズツと、少年は背中から、渡り廊下と少しづれた地面の上に落ちる。

コンクリートには落とされなかつたが、それでも相当なダメージなのだろう。意識こそ失つてはいないが、戦意は完全に尽きていた。

「お、おい。大丈夫か？」

「ご心配には及びません。先輩もご存じでしようが、わたしは祖父から古武道を教わつておりましたので、余裕

です……！」

白雪は髪をさらりとかき上げて、満足げに頷いたが、「お前じやなくて、やられた方な！」

「……」

隆人のそんな声を聞くと、白雪は半目^{はんめ}で片頬を膨らませた。

「そんなことより救助が遅いですよ。先輩は大方わたしが手込めにされそうになるのをチラ見して、妄想の中では欲望の捌け口^{はぐち}に使おうとしていたんでしょうけど」

「いや、助けるまでもなく一瞬で終わつてたし！　つて

いうか人聞きの悪い言い方はよせ！」

「別にいいですよ。助けようとしていただいたことは感

謝します」

くすりと笑みを浮かべながら、やつてきた警備員に少年を引き渡す。

白雪はちやんと気を遣つて投げていたのか、幸いにも怪我はなさそうだ。

まあ、別の意味でトラウマにはなるだろうが。

そう思い、隆人は深々とため息をつく。

その一方で、白雪はまったく別のことを考えていた。



(失敗したあああ。とつさに手が出ちゃつたけど、もう

少し待つて先輩に助けてもらえばよかつたのに……。わたしのばかー！）

白雪は内心涙目になつて、自分の行為を悔やんでいた。偶然侵入者の男が告白してきたとき、きつぱりと拒絕の意志を示したことにはわけがあつた。

（ですがまあ……。先輩の前で、あれだけ強く他の男性には興味がないことをアピールしておけば、さすがにわたくしの気持ちに気づくでしよう！）

ふふ、と口元に小さな笑みを浮かべ、白雪は満足げに目を伏せる。

なお、隆人がそのやりとりを見て、これからのお公開処刑に恐れおののいていることなど想像もしていなかつた。

ただ、少年の怒りを買つてしまつたので、さすがにや
り過ぎたと内心反省する。

しかし、白雪にとつて、ふたつほどいいこともあつた。

（——けど、先輩が無事でよかつたです）

ほつと胸をなで下ろしながら、隆人の横顔を見て頬を
染める。

（ちゃんと、わたしを助けようとしてくれましたし。頼
りになりますね）

なお隆人は白雪に対する恐怖から、目を合わせないよ
うに顔を背けていたが、それを見て白雪は微笑^{ほほえ}む。

（ふふ。先輩つたら、もうわたしのこと意識し始めて

いるようですね。照れて顔を見せたがらないなんて

——

内心ドキドキしながらも、これから的发展に胸をときめかせた。

ふたりの壮大なすれ違いは、まだ始まつたばかりである。

第一節 月ノ瀬白雪の秘密

その空間は白蜃夢^{はくちゆうむ}のようになつて、同時に懐かしい雰囲気がした。

学園特別棟の最上階最奥に位置する天文部の部室は、歴史ある書斎^{しょさい}を思わせる造りだつた。

絵画^{しょが}が飾られたクリーム色の壁と、分厚い本が収められた書架^{しょか}。

かすかに色あせた赤絨毯からは独特の香りがする。中央にある古びたソファーと長テーブルは、学園の歴

史すら感じられた。

「ようこそ先輩。^{せんぱい} 我が第二天文部へ」

「ん？ ああ……」

⋮⋮⋮ 何故に第二？」

という疑問すらすぐには浮かばず、微妙^{びみょう}に間の抜けた返事を隆人^{りゅうと}がしてしまつたのは、ノスタルジーなこの部屋の空氣に酔つていたせいだけではない。

既^{すで}に生徒会長と別れたことを白雪^{しらゆき}から追及^{ついきゅう}されると思つていただけに、謎の状況に肩すかしをくらつたのである。

「なにを惚^ほけて突つ立つているんですか。部活仲間に挨拶^{あいさつ}くらいしてください」

「えつ？ ん……？」

白雪が呆^{あき}れたように指摘した通り、その部室にはふたりの人間がいた。

ひとりは幼さの残る顔立ちの、大人しい茶髪の少女で、どこか小動物めいた空気をまとっている。

もうひとりはスラッシュした細身の女性で、スーツの上に袖を通さず白衣を羽織つてているようだが、机に突つ伏しているので顔はわからない。長髪のストレートが、机の縁から垂れている。

茶髪の少女は何故か隆人からさりげなく目をそらし、机の上の本に視線を落としている。 目を惹くような美人というわけではないが、地味かわ

いい。

思いの外胸もあるらしく、硬いブレザーの上からでも、膨らみの大きさは見てとれた。

「はあ、先輩は顔や名前より先におっぱいのサイズで女性を覚えるんですか？　どうせ彼女のことも脳内でFカップのメスだとしか認識していないのでしよう？」

「くつ……！」

白雪が呆れた半目を作り、男の本能という弱みに切り込んでくる。

（何故俺の視線が的確に読まれたんだ!?　……いや、わかつていてる。相手が俺から目をそらしてると思つたので余計にガン見してしまつた……！）

「つて、勝手にサイズを教えないでください月ノ瀬さんー！」

涙目になつて読書中の少女は顔を上げる。

「そう思うなら自分から名乗ることですね。仮にもこの人は先輩ですよ」

仮という言葉に若干の引っかかりを隆人が覚えている
と、少女が挨拶してくる。

「うう……、愛河^{あいかわ}、真名^{まな}です……。一応、月ノ瀬さんと

同じクラスで」

なかなかに素直^{すなお}で無垢^{むく}な少女らしい。白雪のセリフに
反応することで、答え合わせになつてしまつた。

一年生の五月時点でFカップならば、前途有望だろう。

（しかしまざい……！　このままでは初対面にもかかわらず、俺がただの巨乳マニアだというレッテルを貼られてしまう……！）

白雪から更なるマウントを取られてしまふことを警戒した隆人は、そうはさせると冷静に反論した。

「そういうお前はどうなんだ？　まさか同級生の秘密をバラしておいて、自分は安全なところに雲隠れするわけじゃあるまいな」

「……ツ!?」

不敵な隆人の指摘を受けた白雪は、頬ほおをかすかに染めて押し黙る。

困ったような、戸惑つたような表情を見せかけ、押し殺した。



（まつたく、わたしというものがありながら……。そんなにもあの子の胸が気になるんでしようか……？）

同級生の愛河真名に視線を奪われていた隆人を見て、白雪は嫉妬から思わず口を挟んでしまったわけだが——、いきなりカウンターを受けて困惑した。

実際、白雪のバストサイズは年齢的に全国の平均値をゆうに上回つており、どちらかと言わなくとも大きい部

類である。

——が、ここでは愛河真名という上位の比較対象がいる。

若干だが、自分より上だ。

このままでは白雪は恋愛対象として、隆人に弱みをさらけ出すことになる。

『——ほう、白雪のサイズはそれくらいだったのか？

俺の手に余るどころか、軽く収まつてしまつかなあ？』

白雪の脳裏(のうり)に浮かぶのは、勝ち誇った隆人が嘲笑(あざわら)つてくる姿だ。

(な、なんということを考えるんですか、この人は……
!?)

白雪が隆人に対して持つ、勉強、運動、家柄^{いえがら}、容姿と
いうあらゆるアドバンテージを、バストサイズという一
点を狙い、崩しにきた。

もしこのまま白雪が隆人に気があることを伝えてしま
えば、胸が隆人から見て物足りないのにつき合つてもら
うという弱みをさらけ出すことになる。

たとえば茜色^{あかね}の夕日が照らす、放課後の窓際で――。

『すみません先輩、胸が小さくて……。こんなわたしで
もいいんでしようか？』

『ふつ、俺は気が長い方でな。少し物足りないが我慢だ。
じっくり大きく育つまでつき合つてやろう――』

（あああああああああああつ……！　いやああああああああああ
つ……！）

ワキワキと楽しげに両手の指を動かす隆人の幻影に、
白雪は顔を真まつ赤かにし脳内で悶もだえる。

そんな恥ずかしいシチュエーションを、今後つき合う
ことになつた際に強要されてしまう！

とてもではないが、白雪のプライドが耐えられそうに
ない。

（ですが、ここで逃げるわけにはいきません……！）

一方的に部員のサイズを暴露さいじょしておきながら逃げれば、
それこそ白雪の一完璧な才女さいじょというアイデンティテ

イは失墜する。

もはやこの天文部において、口先だけの卑怯者ひきょうものとなり果てる。

そんなこともまた、誇り高い白雪は我慢ならなかつた。よつて、名家の令嬢れいじょうは戦いを選ぶ。

隆人と差し違える覚悟の勝負に打つて出た。

「別に雲隠れする気などありませんよ。では先輩——わたしはどうのくらいだと思ひますか？」

「なッ……!？」

からかうような笑みで、あえて自信たっぷりに、白雪は前屈かがみの姿勢を取つた。



両手を腰の後ろに回し、自らの胸を強調するポーズに加え、上目遣いの視線は挑発的で——相当な破壊力を生み出していた。

隆人から見て、改めて、思つたよりもかい。
というか、かわいい。

キツチリと乱れなくブレザーを着込んでいながら、ある意味裸よりも蠱惑的だ。

そんな白雪の姿に見惚れながらも、隆人は逆に戸惑つた。

(こいつ、こんな荒技で反撃してくるとは……！)

白雪の胸のサイズという秘密をあえて語らず、男である隆人の裁量に委ねる。

仮に小さい予想をすれば、それよりは大きいと言い張つてくるだろうし、大き過ぎれば非現実的だと流される。どちらにしろ、一年生部員の愛河真名という立派な基準に満たない事実が晒さられることは回避できる。

一見すると逃げの一 手だが、他者に判断を委ねることで勝負をしづらくなる。

ましてや隆人が自己紹介をするという今の状況では、
安易に踏み込むことはできない。

(ダテに名家のお嬢様つてわけじゃないな……。すぐにここまで頭が回るとは——)

才女である白雪の知力と闘争心に改めてうなりつつも、隆人は反撃の態勢を整える。

キツチリとブレザーを着たままでも妙に艶めかしい体勢の白雪をまじまじと見つめつつ、唇の端が緩むのを堪える。

そして、言つた。

「どうやら、実際はだいぶ控えめなようだな。その自信のなさ——」

「そう思いますか？　こう見えても着やせするタイプなんですが、まあ先輩がそう思うのでしたら、ご想像にお任せします」

おそるおそる隆人が尋ねると、白雪は後ろで組んでいたずら

た腕をほどき、くすりと勝利を確信した微笑を漏らす。

「だが、そこまでして頑なに隠すということは、大方詰め物でもしてるんじゃないか？　元がよほど小さいのかかもしれないな」



「なつ……！」

不敵な笑みで放たれた隆人の言葉に、白雪は動搖する。秘密を堅持したことを取り戻された。

白雪が自らバストサイズを明かさないということは、逆に言えば根拠のない侮りを否定する手段もないのだ。

そして、白雪はこの手の侮辱^{ぶじょく}に黙つていられない性質である。

（く……！　わたしが、この胸だけしか取り柄のない女より下だと——先輩はそう言つつもりですか？）

ふたりのやりとりを見て困惑^かしている真名を横目で見つつ、白雪^{かげぐち}はかすかに下唇を噛む。

他人に陰口^{かげぐち}を叩かれるのは慣れている。

それを聞き流し、一笑に付すことも余裕だつた。

しかし、隆人に対してだけは、パツド入りだと舐められたまままでいることはできなかつた。



「あ、あの……ところで自己紹介の件はどうなつたんで
しようか？」

Fカップを初対面の男子生徒にバラされるという羞恥しゅうちプレイを受けた一年女子の真名が、何故か火花を散らしている隆人と白雪を見つつ困惑している。

なお、声をかけられたもうひとり——教師らしきススーツの女性は机に突つ伏したままである。

よくよく見れば机との接地面にクッショングがあり、完全に熟睡しているようだ。

「あの、先生、ちよつと……」

真名が不安げに呟き、ゆさゆさとスース姿の背を揺す

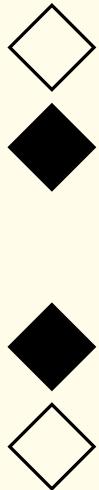
るが、

「……うるさい。ほつとけあんなヤツら。眠い」

一瞬だけ体を起こすと、ダルそうな返事をしてすぐさま机と接着した。

黒髪の長い髪を持つ、なかなかの美人だが、どうやらかなりフリーダメな教師のようである。そしてだらしない。

が、この『教師』という存在を互いに改めて認識したことにより、隆人と白雪の戦いは、新たな局面を迎えた。



「そうですか。そこまでわたしのバストサイズを疑うど
いうのでしたら仕方ありません。——試しに触つて確
かめてみてもいいですよ？」

白雪は先ほどと同じ姿勢になり、いたずら悪戯な笑みを浮かべ
て距離をつめる。

「なつ……!?」

ここで白雪は賭けに出た。

あえて胸を揉ませる選択肢を提示したのだ。

白雪にとつても身を切る駆け引きだが、勝算はある。

隆人とて、この状況で公然と後輩こうはいの胸を揉みにいくわ
けにはいかないだろう。

ここには今、女子部員の他に『教師』がいる。

いかにやる気なさげとはいえ、目の前のセクハラを看過するわけにもいかないはずだ。

健全な中高生男子にとつては抗いがたい誘惑だろうが、この状況で隆人がおさわりを実行するのは極めて至難である。

そして万が一——たとえ直に確かめられたとしても、白雪は勝つ自信がある。

真名に負けず劣らずのバストサイズであり、パツドなどとは無縁であることが証明される。

（そのときの対策も完璧です。『冗談だつたのにひどい』と涙ぐんで、先輩に責任をとつてもらいましょう。まあ、恋愛方面にはヘタレな先輩のことですから、百パーセン

トありえないでしようけど……！）

内心ドキドキハラハラしつつも、白雪は勝利を確信した笑みを浮かべていた。



「くつ……！」

白雪の挑発だということは理解しているが、これでは隆人も手が出せない。

仮に初対面の後輩と教師の前でなくとも、ここでおさわりにいくのは不可能であつただろう。だが、隆人とてただで敗れるわけにはいかない。

ギリギリまで取られたマウントを押し戻そうと、五指を開いた両手をゆっくりと突き出す。

触るフリー——白雪の胸に限りなく自らの手を近づけて脅すことで、彼女を撤退させる手段に出ようとした。（どうだ？）虚勢きよせいを張つたところで、実際に触られるのは嫌なはずだろ？　さつさと『さつきのは冗談です』と言つて逃げるがいい！　そうすれば——やはりパツドの容疑をかけておける！

一筋の汗を額から流しつつ、隆人はあくまで強気に迫る。

対する白雪は若干ドキリとした様子を見せつつも、その場から逃げ出さずにかすかに目をそらす。

その仕草を見て——隆人は戸惑つた。

(待てよ——。何故逃げない？　あれだけ氣位きぐらいの高い
こいつが、いくら自分の格を保つためとはいえ、俺にお
っぱいまで揉ませるというのか……？　そこまで意地を
張るか？)

それは隆人が中学時代から知つてゐる、月ノ瀬白雪の
イメージとは異なる。

白雪は基本的に、他人に興味を示さない。

そんな白雪が側にいることを許可した人間は、隆人の
知る限り自分しかいない。

中学時代、人手が足りないから自分を生徒会へ誘つて
きたことも、不思議といえばその通りだ。

さつきあれほど冷淡に他校生徒の告白を切つて捨てた白雪が、意地だけで、好意のない相手にここまでさせただろうか？

（まさか白雪のヤツ。実は俺のことが好きで、もう一度自分の側に置くためにここへ――）

ドクドクと心臓しんぞうの鼓動が早まり、隆人の鼓膜を打つ。

スロー・モーションで近づいた隆人の指先が、白雪の胸元に限りなく接近したそのとき、

「はわっ……先生！　なんとかしてくださいっ！　この

ままじや天文部が廃部になっちゃいますうう……！」

今まで顔を真っ赤にしてふたりの戦いを眺めていた一年生部員の愛河真名が、目の前の光景に耐えられなくな

つて叫ぶ。

がしがしと突つ伏した教師の背を揺すり、引き起こした。

「……ツ!?

それを見た隆人と白雪は、瞬時にハツと我に返る。確かに、校内での不純異性交遊は停学または退学処分の案件である。

考えてみれば当然の事態に、ふたりは冷静さを取り戻した。

「じよ、冗談もこの辺にしておきましょうか。わたしが先輩如きに胸を揉ませるなんてあり得ませんしね」

「あ、ああ……、悪ふざけが過ぎたな。後輩部員を驚か

せてしまつたみたいだ」

隆人と白雪は素早くアイコンタクトを取り、さわやかに事態の收拾を図る。

（でも、本当に白雪は俺に好意を持つているのか？　もしかして）

（しかし）

淡い、甘酸っぱい期待が、隆人の胸にじわりと生まれる。

仮に隆人の願望めいた予測が事実であれば。

すなわち、白雪が自分を好きなのであれば——、先日フラれて暗黒に叩き落とされた隆人の学園生活は明る

いものになるだろう。

なにせ、これほど可愛い年下の彼女ができるのだから。

「はあ……。よかつたです。なにも起こらなくて……」

真名という少女はよほど初心なのが、あるいは天文部の行く末を真剣に案じていたのか、安堵^{あんど}に胸をなで下ろしていく。

(しかし――)

その年代の平均値を軽く上回るFカップを見て、隆人の中で改めて疑問が生まれる。

(白雪のサイズは、実のところどうだつたんだ?)

さりげなく視線をそらしたつもりだが、隣の白雪にはバレただようだ。

「ふふ。せ、先輩はわたしの胸が気になつて仕方ないようですね。せっかくですので気を持たせておきましょう」

若干声を上擦らせつつも、白雪は満足げな笑みを浮かべ、軽く目を伏せる。

が、次の瞬間。思いもよらぬ出来事が起きた。
むにゅん。

「えつ……？」

白雪の背後から、今まで寝ていた女教師の両手が伸び、ブレザーを押し上げる二つの膨らみを揉みしだいたのである。

「お、この感触はパツドジやないな。ブレザート下着の



せいでわかりづらいうが、サイズはおそらく――

先ほどまで強者の佇まいで部室に君臨していた白雪が、
顔を真っ赤にして表情を崩す。

涙目で子供みたいな声を上げると、顧問教師の手を振り払い、ダッシュで天文部を出て行つた。

• • • • • • • • •

その場に残された隆人と真名は、突然の状況に口を開けて固まるしかなかつた。

「またぐ、部室で騒ぐな……。子供がお前、うは、ぐつぐつ

すり寝られんだろうが」

「いえ、子供ですけど……。

——つていうか、やつてることはあるなたの方が子供ですが。

そう反論したいのは山々だつたが、隆人は言葉を呑のみ込んだ。

どうやら、白雪はパッドを使って增量してはいなかつたようである。

それを知ることができたのは、隆人にとって貴重な収穫と言えなくもなかつたが。

「ところで、あなたは——」

今まで顔を伏せていたために気づかなかつたが、教師

はやや癖のある長髪が特徴の美女だつた。

「おう、私は天文部顧問の倉敷朱音くらしきあかねだ。ところでさつきの白雪のサイズだが——触つた私の所感でよければ聞かせてやろうか？」

「いえ……」

複雑な表情で固まつたまま隆人は即答。

興味がないと言えば嘘になるが、あれほど恥ずかしがられると、さすがに白雪に対し悪い気がしてしまう。

あんな顔もできたのか、白雪は……。

隆人はそう思つた。

「なんだよー、食いつけよー。年頃の男子高校生なら知りたいだろー？ ああん？」

ニマニマと、教師にあるまじき邪悪な笑みで、倉敷朱音が食い下がる。

「そ、そういうのはよくないと思しますつ……」

一方、よほど倉敷女史の蛮行ばんこうがシヨツクだつたのか、壁の端まで避難していった愛河真名は、恐る恐る異議を申し立てた。

「気をつけろよお愛河。この年頃の男とふたりきりになつたら、なにをされるかわからんぞ」

「ひつ！ た、助けてくださいいいいい！」

「ちよつ……！」

隆人は慌あわてて誤解だと告げようとする。が、涙目になつた愛河真名は、脱兎だつとの如く部室から逃

げ出していた。

「……」

ひとり残された隆人が、かかしのように寛つ立つていると、

「ははは。気にすんな。あいつは恥ずかしがりなんだよ。月ノ瀬のヤツとは違った意味でな」

更に調子が出てきたのか、なれなれしく教師は肩に手を乗せてくる。

（いや、あんたに気にするなって言われても——）

一応は美人に属する顔立ちをしているので、嬉^{うれ}しいスキンシップと言えなくもなかつたが、現状は困惑しかない。

「まあでも、卒業後の社会生活ではちよつと困るからな。今のうちから慣らしておかんとな」

「逆に心に深手を負つてゐるような気がしましたが……？」

などと突つ込んだところで、彼女の方はどこ吹く風である。

少なくともこの天文部が、星詠学園の中でも一際特異な空間であることは、隆人にも十分に把握できた。

そしてもうひとつ。

白雪が隆人に対し、特別な感情を抱いているかもしけないという謎が生まれた。

「ところでお前さ。うちの部になんの用があつて來たん

だ？」

「——俺が……、聞きたいですっ」

全てをひとつかき回した張本人の問いかけに、隆人はそう応えるしかなかつた。

——『非』恋愛脳才女の恋心には、まだまだ気づく余地はない。

「試読版 白雪編」はここまで。続刊は3月15日発売の本編でお楽しみください。

※試読版に調整を加えておりますので、本編とは異なる点がござります。あらかじめご了承ください。